

日本語の話し言葉における言及形式について (その1)

服部幹雄・江端真紀・滝下治里

Reference Forms in Spoken Japanese (Part 1)

Mikio HATTORI, Maki EBATA and Chisato TAKISHITA

1. はじめに

呼称とは人を呼ぶときに使われる形式を指すが、これには2つの面がある。すなわち、人を直接呼びかける時の形式(Address Forms, 以下 AF)および人を(通例当人がいない場面で間接的に)言及する時の形式(Reference Forms, 以下 RF)である。前者は、言語に社会的要因がどのように反映されているかを明瞭に観察できる現象として、早くから言語学者、人類学者に関心を持たれ、次々と研究が発表されて来た。その研究の多くは、AFの選択を決める要因、呼称の持つ社会的・心理的意味の解明を目指したものである。AFは話し手(Speaker, 以下 S)と聞き手(Addressee, 以下 A)との性・年齢・地位などの相対的關係、両者の置かれているコンテキストなどによって決まる。初期の研究は solidarity, power, intimacy の要因に基づく親称・敬称(ヨーロッパ諸語では T 形式・V 形式, 英語では First Name・Title + Last Name)の選択の問題をその骨子とするものが多い。日本語の AF についての社会言語学的研究はあまりなされて来ていないが、これは日本語では面と向かった相手に AF を使うことが非常に少ないことによるものであろう。¹ AF 研究において対話者の性を重要な要因として扱っている研究は、Thorne らのいわゆる1983年リストによると6点ある。Kramer (1975)はその先駆的業績と言えるものだが、そこでは女は男よりも使う AF の種類が限られていること、女は男に比べて多くの種類の AF で呼ばれることが報告されている。Wolfson and Manes (1980)は広範囲にわたる会話データに基づき、男と女の呼ばれ方の違いを調査したものである。それによると、女は男より頻繁に親愛語で話しかけられており、これは受け手である女の社会における従属的地位を反映しているものだという。最近の研究では Hinton (1992)がある。これは、若い世代の意識とは裏腹に、依然として言葉における性差が存在することを、親族に対して用いられる AF の使用調査を通して実証したものである。女は男より親密な形式を用いること、女は男より親密度の高い形式で呼ばれることなどが報告されている。女がどのように呼ばれるか、言い換えれば女が言語の中にどのように投影されているかは、また、フェミニズムと連動し、性差別語の撤廃をその目的として研究されてきた課題でもある。それらの研究においても、男なら Title + Last Name (TLN) で呼ばれる場面でも、女は First Name (FN) で呼ばれることが多いことがたびたび指摘されて来ている。日本語の AF 研究においては、その対象が高校生に限られているとは言え、八代(1983)が性差までも考察の対象としている点で貴重である。これは communicative distance の概念を用いて、男女間、先輩後輩間の AF 使用における相違

を説明しようとした点に特徴がある。

一方、RFはAFほど研究がなされて来ているとは言えない。RF選択においては、話題に挙がる人(Referent, 以下R)が新たに加わることで、S-R, S-A, A-Rの社会・心理的關係を同時に考えねばならず、更に状況が複雑になることが予想される。² Murphy (1988)は社会言語学的アプローチで英語におけるRFを扱った数少ない研究の一つである。Murphyは、アンケート調査によって得られたデータに基づき、RF選択においてはa) S-Rの關係(親疎)がもっとも重要な決定因子であるが、A-Rの關係(親疎)も重要であることb) S-Aの關係(親疎)はそれほど影響力を持たないことc) SはAが自分にどういふ振る舞いを期待しているかを考慮する点で、S-Aの關係も決定因子として働くこと、などを明らかにしている。だが、自身も認めているように、この研究においては性差という要因はまったく考慮されていない。また、考察の対象となっているのが最初の言及か2度目以降の言及かが明示されていないのが大きな難点である。言うまでもなくRFは、言及が最初のものか2度目以降のものかで大きな違いが生じてくるからである。³ 対話者の性とRFの關係を直接扱った研究はほとんど見当たらないが、フェミニストの言語研究の礎ともいふべきLakoff (1975)に興味深い指摘がある。すなわち、専門研究者が話し言葉で同僚を事務的に言及する場合、その同僚が男ならLNが使われるが、女の場合は一般的でないというのである。これは、女が男によって一人前の仲間と見なされていない一つの証差ではないかとLakoffは述べている。

本稿は、アンケート調査に基づき、日本語の話し言葉において人(Part 1では芸能人・スポーツ有名人)を言及するのに用いられる標準的形式およびRF選択を決定する社会・心理的要因を(特にSとRの性に焦点を当てて)多少なりとも明らかにしようとするものである。既に述べたように、日本語ではAFが使われることはあまりない。むしろ使わないで済みますのが自然な場合の方が多く、それがまた一つのストラテジーとして働く。一方、RFは極めて頻繁に用いられ、それなくして会話をを行うのは不可能だと思われるほどである。したがって、どのようなRFがどのような状況で使われるのか、いかなる要因がRF選択に関わっているのかを解明することは、社会言語学的にも、また日本語教育など応用面においても意義のあることだと思われる。

2. アンケート調査

1994年7月から9月にかけて行われたアンケート調査の対象となったのは、名古屋市内の大学に在学する男子128人、女子128人である。第1回調査には男子64人、女子64人が参加した。アンケートにはまず自分の好きな芸能人、スポーツ有名人を男女各1名ずつ記入してもらった。以下、SとAとの人間關係(Aが友人か先生か)、SとAの好みが同じか否かを変項として、4つの状況を設定し、それぞれの状況で先に挙げてもらった有名人をどのように言及するかを記入してもらった。記入方法としては、テレビドラマでの予備調査から抽出した頻度の高い11の言及形式から選択する方式をとり、それ以外のものは具体的に書くように指示した。なお、2度目以降の言及で用いられる形式が得られるような状況を設定した。第2回調査には第1回調査とは別の男子64人、女子64人が参加した。ここで使用したアンケートには、まず参加者の嫌いな芸能人、スポーツ有名人を挙げてもらった。以下、SとAとの人間關係、SとAの好みと同じか否かに基づく4つの状況でRFを答えてもらったのは第1回調査の時と同じである。Part 1では第1回調査の結果について報告する。

表1 SとAの好みと同じで, Rは好きな人の場合(%)

	姓+T1	姓+T2	姓	姓名+T1	姓名+T2	姓名	名+T1	名+T2	名	愛称	T	その他
Aが友人												
S→R	0/3	0/0	21/73	0/0	0/0	45/6	3/0	0/0	12/0	18/18	0/0	0/0
M→M	6/6	0/0	3/24	0/0	0/0	61/67	0/0	0/0	15/3	15/0	0/0	0/0
M→F	35/15	0/8	11/24	0/0	0/0	18/6	2/3	0/2	11/9	24/30	0/0	0/3
F→M	2/15	0/3	5/5	2/3	0/2	62/39	2/3	0/0	3/3	24/12	0/0	2/15
Aが先生												
S→R	6/9	3/24	9/30	6/0	0/0	58/12	3/3	0/6	3/0	12/15	0/0	0/0
M→M	9/6	0/15	0/3	9/6	0/6	73/61	3/0	0/3	3/0	3/0	0/0	0/0
M→F	21/17	0/21	2/3	20/2	0/11	41/17	3/3	0/8	5/5	9/14	0/0	0/2
F→M	2/8	0/9	2/2	24/11	0/17	62/30	2/2	0/0	2/0	6/9	0/0	2/14

表2 SとAの好みが異なり, Rは好きな人の場合(%)

	姓+T1	姓+T2	姓	姓名+T1	姓名+T2	姓名	名+T1	名+T2	名	愛称	T	その他
Aが友人												
S→R	3/0	0/3	6/61	3/0	0/3	61/18	3/0	0/0	9/0	12/9	0/0	3/6
M→M	0/0	0/0	3/12	3/3	0/3	88/76	0/0	0/0	0/0	3/0	0/0	3/6
M→F	29/18	0/8	9/21	2/0	0/0	29/12	2/3	0/2	12/9	18/26	0/0	0/2
F→M	3/14	0/3	8/8	6/5	0/2	61/42	2/0	0/0	3/2	17/11	0/0	2/15
Aが先生												
S→R	6/6	0/18	3/33	6/0	0/6	64/21	3/0	0/3	6/0	9/9	0/0	3/3
M→M	6/6	0/9	3/3	9/9	0/9	76/61	0/0	0/0	3/0	0/0	0/0	3/3
M→F	21/11	0/17	5/9	17/8	0/9	45/20	2/2	0/3	5/6	6/15	0/0	0/2
F→M	0/6	0/8	2/3	21/9	0/15	70/35	2/0	0/2	2/0	3/9	0/0	2/14

(数字はあるreference formを使用すると答えた者が, 該当者全体に占める割合を示す. 各項目の左側はRが芸能人, 右側はRがスポーツ有名人の場合. 略語の意味は次の通り. T1:さん・くん等の敬称, T2:選手, 先生等の職業上のタイトル, T:T1とT2を合わせたタイトル, S:話し手, A:聞き手, R:言及される人, M:男, F:女)

3. 結果と考察

結果は表1, 2の通りであるが, 比較検討を容易にするためにパーセンテージを使用した。まず有名人に対してどのようなRFが使われているか概観してみる。全般的に言えることは, すべての状況で「姓+名」が非常に多く使われていることである。「姓+名」はAFではまず使われない形式であること, また書き言葉において2度目以降の言及で「姓+名」が繰り返されることはあまり一般的ではないことを考えると,⁴ これは話し言葉におけるRFの際立った特徴であると言ってよい。「姓+名」と共によく用いられているのが「姓」であるが, これは2度目の言及であることを考えれば納得のいくものである。ただし, Rが芸能人であるかスポーツ有名人であるかで「姓+名」と「姓」の使用実態は明確に異なっている。一般に, スポーツ有名人は芸能人より「姓」で呼ばれることが多いと言えそうである。この理由については後で検討する。興味深いのは, AFでは一般的な形式である「姓+T1」がRFではそれほど使用されていないことである。この傾向は, RがSよりはるかに年上である場合にも見られた。Rが対話の場にはいない人であること, 通例SはAとRの個人的関係を考慮する必要がないこと, したがって敬称を省いてもだれに対しても非礼とはならないという意識が働いていると考えられる。「愛称」は好きな有名人の場合に多く見られるが, その選択はその人物が同世代の者になじんだ愛称を持っているかどうかによることが多い。つまり, ある有名人に親友以上の親愛感を抱いていても, その人に普及した愛称がなければ他の形式が選択されるということである。そのほか, 「T」はまったく使われないこと, 「名」にタイトルの付いた形式もほとんど用いられないことが全般的な特徴として挙げられよう。「その他」は「あの人(男, 女)」などの代用表現が典型的な形式であった。

さて, 各状況のRFの使用について, 表1の「Aが友人」の場合から順に見ていくことにしよう。ここはSが好きなRのことを好みと同じ友人のAに対して話題に出す状況にある。つまり, SはAにまったく気兼ねすることなくRを言及することができるわけである。Rが芸能人の場合, まず目につく特徴は, 男が女より「姓」で言及されることが多いということである。たとえばM→Mでは「姓」が21%見られるのに, M→Fでは3%と急減している。M→Fで使用が多いのは「姓+名」である。またM→FではM→Mで見られなかった「姓+T1」の形式も用いられている。これらの現象はどのように説明できるだろうか。学生の男の友人同士のもっとも一般的なAFは「姓」であろう。これは男同士で仲間であるという意識を最も強く表す形式であると言える。Sが男の場合, 自分の好きな同性のRに対してこのような仲間意識を感じたとしても何ら不思議ではない。「姓」の使用は男同士のsolidarityの反映と言える。一方, 女のRに対しては, 親しみは感じるが, 異性であることから心理的な距離は遠い。それゆえ「姓」の使用が控えられるのだと考えられる。「姓+T1」は「姓」より丁寧な形式であるが, これもSのRに対する敬意でなく, SとRの心理的距離によって説明されるべきものであろう。⁵ Sが女の場合にも同じことが言える。F→Fの同性同士ではほとんど見られなかった「姓+T1」がF→Mでは35%にも上っているが, SとRの心理的距離の遠さの現れであると解釈できる。女は丁寧に振る舞うべきという規範意識は, Aが親しい友人であること, F→Fにおける「姓+T1」の使用がわずか2%であることを考えると, ここでは影響していないと見るべきであろう。

Rがスポーツ有名人の場合は, その性別にかかわらず「姓」で言及する者が増えている。特にM→Mでは73%にも上るなど, Rが男であるときに顕著なのは芸能人の場合と同じである

が、M → Fでも24%も「姓」使用が現れているのが注目される。芸能人の場合はM → Fにおける「姓」使用はほとんど見られなかったからである。スポーツ有名人はなぜ「姓」で呼ばれやすいのであろうか。スポーツ選手の目標は、究極的には、勝つあるいは記録の向上を目指すことにある。人間的魅力やアイドル性で人気を得ている選手もいないではないが、基本的にはスポーツ選手の評価は実績次第ということである。「姓」が往々にしてその人間の独立性、成熟を、「名」や「愛称」が装飾性、未熟を暗示することを考えれば(「姓+名」はその中間に位置すると考えられる)、実績でその地位を得たスポーツ選手が「姓」で言及されやすいのも納得できることではないだろうか。⁶ もっともF → Fの場合は「姓」使用は非常に少ないが、これは心理的距離が近い女同士がAFで「姓」を通例使用しない⁷ ことの反映と見ることができよう。

次に「Aが先生」の場合について見てみよう。「Aが友人」の場合と比較して、スポーツ有名人で「姓+T2」が大幅に増加していること、芸能人ではSが女の場合に「姓名+T1」が増加していることなど、全般に呼び捨てや愛称を避ける、またフルネームを使用するなど、正式な形式を使おうとする傾向が見て取れる。先生はAであるから、敬意のない形式の使用が先生の気分を害することにはならないはずである。しかし、SはAが自分にどのような振る舞いを期待しているかを考慮し、社会で認められている規範に従うと考えられる先生に合わせて、改まった「安全な」形式を選ぶのであろう。それゆえ、先生の気質(謹厳が気さくか)や年齢に依存する部分も大きいと考えられる。

Sが好きなRのことを自分とは好みの違うAに対して話題に出す場合の結果が表2である。この範疇を設定するとき問題意識としてあったのは、Murphy (1988)の「SによるAとRとの親疎の顧慮は、SとRとの人間関係について重要」という指摘がどこまで当てはまるかということであった。SがAとRとの人間関係に何らかの配慮を示すなら、Sは自分とRとの親密度が高くてもAとRの親密度が低ければ、A → Rで使われると予想される言及形式以上の親密度の高い形式はなるべく避けるはずである。具体的には、A → Rで「姓+T1」の言及形式が使われると予想される場面では、Sは「愛称」、「名」、「名+T1」(あるいは「姓」⁸)の使用を控えるということである。ところが表1→表2の変化を見ると、Aが友人の場合に「姓」、「名」、「愛称」の使用が減少しているものの、大きな変化はなく、Aが先生の場合は、ほとんど目立った変化がない。ここでは、A → Rで使われる言及形式より親密度の高い形式でSがRを言及したとしても、SとAの人間関係を損ねるほどの影響はないという判断が働いているように思われる。つまり、SはS-Aの関係ほどA-Rの関係に顧慮していないというわけである。これは、SとAは現実の人間関係を結んでいるのに対し、SとR、AとRの関係は、それがどれほど親密あるいは疎遠であると言っても、現実の人間関係ではないというところに原因がありそうである。また「愛称」や「名」の使用が必ずしも親密度に由来するものでなく、多くは同世代の若者の慣習に従うところに問題があったかもしれない。Rが有名人でなく、SやAと現実の人間関係を結んでいる人間であったなら、また違った結果になったであろう。

以上、有名人を言及する際のRFの使用実態を明らかにし、その使用を決定する社会・心理的要因について考察してきた。Rを有名人に限定することで、S、A、Rが置かれている状況の諸特徴をできるだけ中立的なものにしようとしたのであるが、それでも予想どおり、さまざまな要因が絡み合い、RF選択にどの要因が関わっているのか不明な部分も多く残されている。また、ここでは扱わなかったRの性以外の諸特徴やAの性も検討してみなければならぬであろう。しかし、現代日本語において、名前の付け方は男女平等であるにもかかわらず、その使われ方を選択する社会的慣習に性差(言語を使用する男女の、また言語に投影される男

女の)が存在していることは最低限示し得たと思う。

Part2では、第2回調査の結果、およびRがS、Aと通常の間人関係を結んでいる場合について扱う予定である。

注

1. 相手の注意を喚起するときに用いられる summons と、既に相手の注意がこちらに向いているときに用いられる AF とは区別されなければならない。前者は日本語でも頻繁に用いられる。
2. 研究対象が話し言葉か書き言葉かも重要になる。
3. たとえば、最初の言及では FN-LN が多く見られるであろう。
4. ここで考えているのは文学作品でなく、新聞記事など情報内容を読者に伝えるのが主な目的の散文である。
5. Fasold (1990:30)には「西洋社会においては、伝統的に女の方が男より丁寧な形式で呼びかけられる」との指摘がある。また、Lambert and Tucker (1976)はフランス語の代名詞による呼称調査で、大人の男性が子供に呼びかける場合、少女に対しては少年に対する時より丁寧な vous が多く使われたと報告している。
6. 芸能人の場合は「姓+名」が一体の名前として感じられること、また有名人の知名度、姓の特殊性の度合も要因として考えられよう。
7. しかし、女同士が AF に「姓」を用いる例は、若い世代で増加しているように思われる。
8. 「姓」が「姓+T1」より親密度が高い形式とは言い切れないが、ロック系アーティストが熱烈的なファンにしばしば「姓」で言及される例がある。

本研究は名古屋女子大学教育研究所研究助成金による研究成果の一部である。末尾であるが、付記して謝意を表する次第である。

参考文献

- Brown R. W. & M. Ford 1961. "Address in American English," *Journal of Abnormal and Social Psychology* 62:375-385.
- Brown R. W. & A. Gilman 1960. "The pronouns of power and solidarity," in Sebeok, T. (ed.), *Style in Language*. Cambridge, MA:M.I.T. Press. pp.253-276.
- Cameron, D. 1985. *Feminism and Linguistic Theory*. London:Macmillan.
- 遠藤織枝 (編) 1992. 『女性の呼び方大研究』. 東京:三省堂.
- Fasold, R. 1990. *The Sociolinguistics of Language*. Oxford:Basil Blackwell.
- Hinton, L. 1992. "Sex differences in address terminology in the 1990s," in Hall, K., M. Bucholtz & B. Moonomon (eds.), *Locating Power*. Berkeley:Berkeley Women and Language Group. pp.263-271.
- Ide, S. & N. H. McGloin 1991. *Aspects of Japanese Women's Language*. 東京:くろしお出版.
- 菊地康人 1994. 『敬語』. 東京:角川書店.
- Kramer, C. 1975. "Sex-related differences in address systems," *Anthropological Linguistics* 17:198-210.
- Lakoff, R. 1975. *Language and Woman's Place*. New York:Harper & Row.
- Lambert, W. & G. R. Tucker 1976. *Tu, vous, usted:A Social-Psychological Study of Address Patterns*. Rowley, Mass:Newbury House.
- 南不二男 1987. 『敬語』. 東京:岩波書店.

日本語の話し言葉における言及形式について (その1)

- Murphy, G. L. 1988. "Personal reference in English," *Language in Society* 17:317-49.
- 小倉千加子 1991. 『アイドル時代の神話 Part II』. 東京:朝日新聞社.
- Reynolds, K. A. (れいのるず=秋葉かつえ) (ed.) 1993. 『女と日本語』. 東京:有信堂高文社.
- Romaine, S. 1994. *Language in Society*. Oxford:Oxford University Press.
- Spender, D. 1980. *Man Made Language*. London:Routledge & Kegan Paul.
- Thorne, B., C. Kramaræ & N. Henley (eds.) 1983 *Language, Gender and Society*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Wardhaugh, R. 1986 *An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford:Blackwell.
- Wolfson, N. & J. Manes 1980. "Don't 'dear' me!," in McConnell-Ginet, S., R. Borker & N. Furman (eds.), *Women and Language in Literature and Society*. New York: Praeger. pp.79-92.
- 八代京子 1983. 「高校生の呼称」, パン, F. C., 秋山高二, 掘素子 (編), 『機能による言葉の分析』. 広島:文化評論出版.